

人間学 2 「北東アジア環境共生プロジェクト」 報告

申 珠莉*

はじめに

北東アジア環境共生プロジェクトの研究キーワードは、海外交流／ものづくり／環境対策／中国・韓国・日本／国際理解／環境デザイン／他からなり、人間環境学科・芸術学科・国際学科いずれの学生も、北東アジア環境共生についてそれぞれの問題意識から取り組むことのできるテーマ設定となっている。

日本・中国・韓国の3カ国が、発展するアジアの核となっていることから、本プロジェクトでは、中国や韓国を本学学生が訪問し、都市開発・環境デザイン・市民意識をテーマに、相互認識を深めることを目的とする。

これまでの成果としては、2010年開催の上海万博を起爆剤として上海地域がいかなる発展を遂げ、市民意識がどのように変化をしているのか、その他にも上海市に隣接する無錫市にある太湖で深刻化した工業による水質汚染に官民をあげていかなる努力がなされたのかを、そして韓国のソウル市では「デザイン・ソウル」計画によって再開発進められた、都市のハード・ソフト両面からアプローチからこれらがいかに市民意識までもが高められたのかなどを、現地視察と専門家からの意見聴取、学生交流によって調査してきたことをあげられる。

これらの実績から、日本・韓国・中国という北東アジアの3カ国は、その地理的近接性や経済的結びつき、さらには人的交流の活性化などに伴う環境共同体としての共通認識が求められる隣国同士である認識を確かなこととして共有した。そしてこの場合の「環境」とは、大気やエネルギーなどの物理的環境を指すのみでなく、産業化や経済発展に伴う都市環境、少子高齢化と社会保障変化に伴う社会環境、再開発や街づくりに活かされている文化的環境などへと、その認識に関する幅を広げてきた。

このようなこれまでの研究成果を踏まえ2017年度の人間学2では、韓国ソウルにおける研修を通じて、こうした様々な環境共同体としての韓国の諸側面を視察・体験し、また交流を図る活動を9月の4～9日までの5泊6日にわたって実施した。事前の準備として、計4回の事前

受理日2017年11月22日

*教養学部芸術学科教授 「北東アジア環境共生プロジェクト」全体の担当者は鳥飼行博、金慶珠、申珠莉の3名。

授業を行い、学生たち自らが環境というキーワードに沿った計画を立て、事前調査に基づく日程を組むなどの自主的参加を促した。その結果、研修現場では効率的な時間管理やスケジュールの履行が可能となるなど、学生らの積極的な参加姿勢は研修の成果にも極めて肯定的な影響があるものと判断される。具体的な研修日程および主な内容は以下の通りである。

日付	研修日程	内容
9/4	自由研究テーマのプレゼン	各自の専門を踏まえた研究
9/5	国民大学特別講義 および学生交流会	国民大学言論情報学部・李チャンヒョン教授の講義 「コミュニケーションの能力」
9/6	清溪川・ソウル中心部視察 環境デザイン事務所視察	ソウル都心の環境デザインと 再開発事業
9/7	梨花女子大学訪問 韓国の伝統と現在の視察	環境色彩デザイン講義とプロセス視察
9/8	自由研究日	旧都心・韓国伝統文化の理解 新都心・江南地区など
9/9	自由研究の中間報告	まとめ

1. 国民大学との交流

国民大学の言論情報学部李チャンヒョン教授の特別講義は、コミュニケーションに関わる大変興味深いものであった。近年、他者への配慮、世間への考慮、双方向の密度の高いコミュニケーションなどが十分ではなく、お互いを支え合う社会的なサポートが乏しく、理解不足や軋轢によって容易に不適応を生じやすくなっている傾向がある。その結果、個々人の孤立を促し、集団や組織の連携的な行動が不十分になりつつあると言える。それゆえ、円滑な対人関係、組織の活性化を図るために、コミュニケーション力の向上を目指すことが求められる。



写真1 李チャンヒョン教授の特別講義

自分のメッセージを適切に表出し（記号化）、他者のメッセージを的確に把握する（解読）ことによって、個人はより活性化し、集団の高い成果も期待される。個人を結ぶ対人関係、さらに集団や組織の活動を考慮するならば、地位や役割の実現、親密な感情の促進（凝集性を高める）、多様な葛藤の解決、生産性（目標）達成のいずれもコミュニケーションの効率を高めることによって実現できるものである。

近年、これらのコミュニケーションへの期待は国際関係においてもなおその実践が注目されている。このようなことを踏まえながら本特別講義では個人の経験からのさまざまな問題を取り上げ、若者の現状と未来に対する考えなど有意義な意見交換を通じてお互いを分かり合えるキッカケづくりとなった。

2. ソウル中心部環境デザイン視察・伝統と現代の共存に向け

ソウルの政治・経済・文化の中心地である明洞を起点に、ソウル市庁や光化門広場、北村など旧市街地のサーベイを行った。ソウルは朝鮮王朝からたどればその歴史も600年と長く、宮殿などの伝統的な建造物や日本による植民地支配時代の近代的建物が温存される一方で、その多くを取り壊し、新たな建物や道路の再整備（デザイン・ソウル計画）を急速に実行するなど、ソウル特有の都市計画の工夫が感じられる視察となった。

まず、ソウル市における清溪川再開発跡地を中心とする都市整備の様子を視察した。



写真2 清溪川復元事業

ソウルの代表的な故宮である「景福宮」を視察した。政治の場として建立された景福宮と民俗博物館を訪問し、朝鮮時代の生活に対する考え方や様子などが理解できる体験となった。朝鮮時代の正宮である、景福宮と昌徳宮、宗廟に囲まれた「北村韓屋村」は、朝鮮時代（1392～1910）から残る韓国の伝統家屋「韓屋」が密集するエリア。朝鮮時代に王族や両班と呼ばれた当時の貴族たちが住んでいた、歴史の面影を色濃く残している地域であるが、近年、地下鉄3



写真3 北村・旧と新市街地の混在する都市ソウル

号線安国駅の北側に広がる斎洞，桂洞，嘉会洞には，1点ものの作品が並ぶ個性的なショップや，ほっこりくつろげるおしゃれなカフェなどが立ち並び，歴史と現代が共存するこのエリアとなっている。伝統というありようを現代における見え方，見せ方を改めて考えることの大切さを実感することができた。

3. 韓国における環境デザインの今

『環境デザイン』というテーマで，KHSDESIGNでは，環境デザインのプロセスについてさまざまな事例を通して，社会的問題への解決策としての環境デザインの取り組みについて体験



写真4 KHSDESIGNの環境デザイン事例研究会

体感することができた。サービスデザイン技法を用いる公共デザインや、デザインプロセスの一部として防犯に焦点を当て、人の活動を促進するデザインによる防犯手法を提示することで、より安心安全な都市生活環境づくりに貢献することを目的とし、防犯まちづくりの方向性などのさまざまな環境デザインの実例などをプレゼンしていただいた。ヒト・モノ・バの関係づくりに加え、トキとコトづくりの概念が加わった最新の概念を示してもらいました。

4. 梨花女子大学色彩研究所の環境色彩計画講義

色彩関連施設や機器と色彩情報ライブラリを構築しており、これをベースに色彩デザイン専門人材養成事業や国内外の色彩関連のセミナー、色彩教材の開発、産業色彩技術サポート、色彩デザイン関連プロジェクト（環境色彩、製品の色彩、映像色彩など）の実行などを主な内容として、韓国内初の色彩専門研究機関として活動している梨花女子大学色彩研究所では、デザインの決定的要素である色彩に対する科学的研究の現場を当研究所の専門家からの詳細な説明を通じて体験できたのみならず、質疑応答の時間を通じて日頃の疑問に対する知識や情報を得



写真5 梨花女子大学色彩研究所



写真6 環境色彩計画講義



写真7 ECC Ewha Campus Center

ることができた。

さらに、ECC (Ewha Campus Center) などキャンパス環境デザイン関するサーベイも行った。

5. 学科別活動として

国際学科は、より専門分野関連した知識と体験を得るための研修として、「日韓の歴史認識問題」をテーマに、ソウルに位置する「戦争記念館」を訪れ、世界第二次大戦後の冷戦の始まりと朝鮮戦争という歴史を直に体験した。朝鮮半島の歴史の一端を直接観察することで、学生たち自らが両国の歴史に対する主体的な判断と主張を持てるようにするきっかけとなった。

デザイン課程の学生たちは、ソウル市でも世界的な建造物として注目されている DDP (Dongdaemun Design Palaza) を訪れた。DDP では、最先端のデザインのトレンドを体験できただけでなく、建築物と都市の調和という問題についても改めて考えさせられる機会となった。

おわりに

本年度における「北東アジア環境共生プロジェクト」のソウル研修は、環境問題へのさまざまな取り組みをベースに日韓の現在と未来のあるべき姿を見出すことがテーマであった。また、そのために現地での特別講義や交流会などを通じて、日韓両国が抱える共通の課題を認識しながら、自ら積極的にコミュニケーションを図り、理解しようとする学生たちの姿勢を導き出すことができたのが本研修の最大の成果と考える。

日本とは異なる国のあり方を論理で理解するという限界を超えて、その物理的制約を取り払った直接体験を通じて身に付けた知識や認識、そして感性は、急変する北東アジア社会の未来を担う若者世代に対して、日本の大学教育が継続的に提供していくべき体験学習の貴重な場でもある。その意味で、北東アジア環境共同体という切り口から、学際的なアプローチに基づく体験を可能にしている本プロジェクトは、今後においてもその内容を充実させながら、今後においてもその成果と意義を継続させるためのさらなる努力が必要であると感じている。